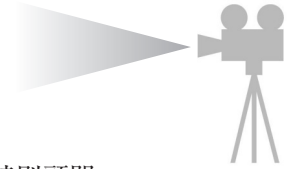




## 映画とその時代 ⑥



三井住友信託銀行株式会社 特別顧問

映画倫理委員会 委員 **桜井 修**

NHKの朝ドラ「梅ちゃん先生」が高視聴率を挙げているという。ヒロインが成長してゆく時代背景は敗戦直後。周辺は焼け跡だらけのバラック住まい。異様な熱気とエネルギーの溢れる闇市。おそらく若い世代には想像も及ばぬ別世界だろう。しかし、ヒロインとほぼ同世代の身にとっては、その頃の世相や情景が、色や匂いとともによりありと蘇ってくる。この時代、人びとはひとりひとり自らの甲斐性だけで生きる外はなかった。敗戦の虚脱と混乱のなかで、頼るものはなく、甘える先もない。それでも思い返してみても、焼け跡だらけの巷には、ふしぎに明るい空気が流れていた。おそらくそれは、長い戦禍を生き抜いた高揚感と、一天俄かに吹き抜けたような解放感を人びとが共有していたからだろう。

闇市と呼ばれた猥雑な場は、まさにこの時代の空気を凝縮していた。ほとんど無法地帯に近く、あらゆる犯罪の温床だったが、何よりも（生）のエネルギーがひしめき合い、沸騰していた。人間のもつ根元的な逞しさが、何の銜もなく弾け合っていた光景は忘れられない。そしておそらくあの熱気が、そのままその後の高度成長に昇華していったのではないか。

昭和24年の映画『野良犬』は、敗戦後4年目の廃墟の東京を、そのまま絶妙な映像世界に残して

いる。監督は黒澤明。まだ、（世界のクロサワ）になる以前の作品だ。

若い刑事（三船敏郎）がスシ詰めバスの中で拳銃を掏られる。職責と正義感から刑事は必死にその行方を追ひ、闇ルートとの接点を求めて、汚れた復員兵の姿で、闇市から闇市をひたすら歩き廻る。オープンセットによるシーンも見事だが、何と言っても圧巻は、隠し撮りによる長尺のシークエンスだろう。当時もっとも危険地帯だった上野公園界限やアメ横などの闇市は到底ロケなどできない。助監督が同じ復員兵姿で三船になりすまし、膨大な隠し撮りを重ね、監督の編集の手練が、もはや二度と見ることでできない当時の闇市の実景やその猥雑さをなまなましいまでに捉えている。そして昭和24年という年の茹だるような真夏の巷。その頃の流行歌（ブンガワン・ソロ）や（夜来香）が盛り上げるムード。何度観直してもこの長尺のシークエンスには、タイムスリップの陶酔に浸されてしまう。これは、文章では金輪際表現できない映像の醍醐味だろう。

『野良犬』は、本邦初のセミ・ドキュメンタリーのテイストをもっている。『羅生門』以前の作品だったために海外の評価は遅れたが、70年代以降、ニューシネマの旗手たちのバイブルになった。—————